

## 寄稿

## 炭やきで夕日の松原まもり隊に参加して

井上みずき<sup>12</sup><sup>1</sup> 秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科<sup>2</sup> 日本大学文理学部生命科学科

私は平成 20 年 4 月 1 日～28 年 3 月 31 日まで秋田県立大学生物資源学部生物環境科学科森林科学研究室で助教を務め、植物の繁殖生態学や個体群生態学・群集生態学に関する研究を行ってきた。その間、森林科学研究室を中心として地域住民と協同で行われている「炭やきで夕日の松原まもり隊」に参加した。この地域活動は、マツ枯れ防除のために切り倒されたマツの有効活用を目指したものであった。薪割りや伐倒、炭窯に生木を入れるといった実際の活動では非力で役立たずの私であったが、地域住民との会話を楽しむという形で活動に参加するうちに「風土」という言葉に対する新しいイメージを獲得した。つまり、風土は「昔々」作られたものではなく、「現在進行形」の自然と人間のかかわりの積み重なりであること、また、マツ林を守る隊の活動は「最新」の秋田の風土の 1 つであるという確信だ。私が秋田の新「風土」を体感できたのは、研究室の先生や学生、そして何より活動を支えている地域住民の方々のおかげである。心から感謝したい。

**キーワード：**炭やき，風土，秋田

私は平成 20 年 4 月 1 日～28 年 3 月 31 日までの 8 年間、秋田県立大学生物資源学部生物環境科学科森林科学研究室で助教を務めた。秋田では、主に湿原の雌雄異株植物ヤチヤナギの集団の性比がオスに偏る要因を明らかにする研究や天然秋田スギのクローン構造や老齢木の成長を律速する環境要因を明らかにする研究、秋田の里地里山の送粉群集を明らかにする研究、京都にてシカが森林生態系に与える影響を明らかにする研究、森林に自生するヤマノイモに感染するウイルスの分布状況に関する研究を行うなど植物の繁殖生態学を中心に個体群生態学や群集生態学の研究を行った。

今回は、秋田県立大学在職時に森林科学研究室を中心として地域住民と協同で行われている「炭やきで夕日の松原まもり隊」という地域活動に参加した感想を寄せてほしい、という依頼をうけたので、まとまりのない文章で申し訳ないが少しお付き合いいただきたい。ちなみに、マツ枯れと隊の活動について

の詳細は蒔田（2016）を参照いただきたい。

**静的「風土」**

祖父の家の廊下には歴史や民俗学の分厚い本が上から下まで、右から左へずらっと並んでいて、そのために光が廊下に入らず薄暗く埃っぽかった。その中に風土記と記されているものがあり、風土という言葉は幼いころに祖父の家で知った。したがって、「風土」という言葉を聞くと、自然現象としての気象や地質・景観といったものだけでなく、人間の文化が含まれる言葉として理解していた。加えて、その埃っぽい分厚い本のイメージそのままに風土とは「古い、暗い、淀んだ」静的で昔作られたものであると感じていた。ところが、秋田県立大学にて地域貢献活動をする中で、私の「風土」のイメージは生き生きとした動的で現在進行形の言葉に変わった。

## 防風マツ林におけるマツ枯れ

秋田県立大学教員採用面接を経て採用が決まった後に秋田を訪れた際、蒔田先生に天王グリーンランドのタワーに連れて行ってもらった。見わたす限りの青々としたマツ林に圧倒された。もちろん、追分駅から大学に来るまでもマツ林を横目に見ていたわけだが、高所から望む延々と帯状の防風林は非常に見ごたえがあった。しかし、数か月後の赴任時に特急「日本海」で秋田入りすると、印象は一変する。マツ枯れで枯死し、白骨化した元マツ林が急速に砂丘に飲み込まれていっている様子が見て取れた。もちろん、赴任前にずっと住んでいた京都においても大文字山などで一斉にマツが消えていった時期はあったが、森がなくなるわけではなかった。カシやシイがすかさず、その場を埋めていていた。しかし、ここではマツ枯れは森の消失を意味するのだと愕然とした。

## 炭やきで夕日の松原まもり隊の活動

赴任後の右も左もわからない中、私は研究室の学生さんとともに、マツ枯れ防除のために切り倒されたマツの有効活用を目指した炭やき活動に参加しはじめたのだが、非力なので薪割りや伐倒などは早々に辞退した。そこで、材を炭窯に入れる手伝いをすることが多かった。ただし、生木というのは、見た目よりずっとずっと重い。ここでも非力なので、細いのをよろよろ運ぶということで大して役に立たなかった。で、結果的には、もっぱら昼御飯の用意を精力的に行っているグループの「手伝い」に専念した。つまりは、大して働かずにしゃべりに行っているようなものだった。ボランティアのみなさんとしゃべる内容はキノコの話、ニセアカシアの話、鰯の話、漬物の話、焼き芋の話、飾り炭の話、祭りの話、天気の話、そして最大はマツ枯死木探索と炭やき。その話の中には、大小さまざまな知恵が詰まっていた。

## 動的「風土」

東京にいと人間が主役である。かかわってくる自然は天気ぐらい。京都でも市内にいと自然を上手に取り入れた文化はあるが、自然はアクセントの1つという気がする。しかし、秋田は違った。圧倒的な自然があって、人間は知恵をもってその自然と寄り添い、時には戦っている。ボランティアのみなさんと話をしたり、雪の中で炭やきをしているうちに、これが風土なのではないか。風土は「昔々」ではなく、「現在進行形」の自然と人間のかかわりの積み重なりなんじゃないだろうか、と思ったのだ。つまり、今、こうしてマツ林を守っている活動は「最新」の秋田の風土の1つなんじゃないだろうか？と。科学者にしては情緒的で根拠がないけれども、私はそう確信した。

炭やきに行った日は非常に疲れる。しゃべりに行っているだけでもかかわらず、である。終わって半日ぐらい、私は使い物にならない。「マツ炭の直火」疲れとでもいうような現象がおきる。だから、この活動に全く参加しなければ、土曜日数十日分は自由に研究し、論文を1本ぐらい余計に生産できたかもしれない。しかし、この活動に参加したことで多少は秋田の風土に貢献できたのではないかと自負している。

## 結びにかえて

秋田県立大学在職時には、ほかの教員のみなさんに、「炭やきに参加すると、世代を超えた人との連絡の仕方や語らいで学生の人間力があがる」といっていた私ではあったが、「風土」を体感した今、実は人間力を少し上げてもらったのは私の方だったかもしれないと感じた。職場と家の往復だけにならずに済んだ今、会に誘ってくれた蒔田先生・星崎先生・学生さんたち、そして活動を支えている地域住民の皆さんに心から感謝したい。

蛇足ではあるが、1歳から炭やきに参加していた娘（5歳）は、東京に行ってから炭やきにいけないことが不服そうである。「私、お母さんのお仕事の森で遊びたいの」。彼女にとっては、炭やきはおじさん、

おばさん，学生さんにかわいがって遊んでもらえる  
最高の遊び場だったようだ。

### 文献

蒔田明史（2016）. 「炭やきで夕日の松原まもり隊」  
のめざすもの『Green Age』6 巻 18 ページ-22  
ページ.

〔 平成 28 年 11 月 30 日受付 〕  
〔 平成 28 年 12 月 22 日受理 〕

## Comments on volunteering in Sumiyaki-de-Yuhi-no-Matsubara Mamoritai

---

Inoue Mizuki <sup>12</sup>

<sup>1</sup> *Department of Biological Environment, Faculty of Bioresource Sciences, Akita Prefectural University*

<sup>2</sup> *Department of Biosciences, College of Humanities and Sciences, Nihon University*

I worked as an assistant professor at Akita Prefectural University from April 1, 2008 to March 31, 2016, in research fields such as plant reproductive ecology, population ecology, and community ecology. During that time, I participated in “Sumiyaki-de-Yuhi-no-Matsubara Mamoritai,” which was operated in cooperation with local residents and the members of the Laboratory of Forest Sciences. This community activity aimed to make effective use of the pine logs cut down for the control of pine wilt disease. Although I could not play an active role in practical activities such as cutting down and placing logs into charcoal kilns, I came to appreciate a new dimension of “climate” through fun conversations with local participants. I learned that a local climate is not something that was established a long time ago, but is rather formed by ongoing accumulation of the relationship between local people and nature. I now strongly believe that the activities to protect the pine forest are contributing to the formation of one of the “latest” Akita climates. I was able to experience Akita’s new “climate” thanks to the colleagues and students of the Laboratory of Forest Sciences, and also the local people who supported the activities. I really appreciate the great opportunity to have worked with them.

**Keywords:** Pinus charcoal, Climate, Akita